

わが教会学校奮闘の記録

名誉司教 糸 永 真 一

わたしが初代主任司祭を務めた長崎・八幡町教会の創立五十周年を機に、いろいろと当時を思い出している。その中で、小中学生の要理教育に力を注いだことがある。子供の信仰教育は信者の両親の務めであるばかりでなく、教会の務めでもあるからである。

八幡町教会は長崎市内の小教区の中では所属信者数四百余りの小さな教会であったが、信者の小中学生は五十人を超えていた。学年ごとに要理クラスを編成するのが理想だが、それができなかつたので、小学生は二年年合わせて一つの要理クラスとし、中学生はクラスにまとめ、毎土曜日の午後、要理の授業を行った。各要理クラスごとに、発達年齢に応じた、体系的な要理教育のためのカリキュラムを作り、担当の要理教師

「神が全能である」とは、神様が私たちの思い通りに何かをしてくれる、ということではないという。神は人間の世界と歴史に介入して、人間の望みではなく、神が望まれる方向へと力をもって導いてくださるからこそ全能であり、力強い神なのです。当然のことながら、神様のお考えになつていけることは私たちに理解できません。もし神が人間の思い通りに何かをしてくれるとしたら、それは神ではなくもはや人間の僕とな

たちに提供すると同時に、保護者にも毎月配布して、家庭の協力を求めた。この授業計画(カリキュラム)は、子どもたちを祈りと典礼に向かわせ、同時に、生活の聖化と使徒職に向かわせる実践的な信仰教育を目指すものであった。そのうえ、小学生の場合は、授業の復習のために毎週宿題を出すようにし、両親とともに回答するように仕向けた。また、教会学校に保護者会(P.T.A.)を設けて、親たちが共同で教会学校に協力するように求めた。さらにまた、教会学校にかかわるすべての経費を小教区会計の中で予算を組んだ。こうしたことの結果、教会学校は保護者ならびに小教区共同体全体の共同の仕事となり、小中学生とも百パーセントの出席率を達成できた。

毎週土曜日、要理クラスが終わると小学生、中学生がいます。モーセの十戒の中では「あなたはいかなる像も造ってはならない—あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない」という偶像を造ることと礼拝することを禁じています(出エ20・4・5)。ここで言われている偶像礼拝とは、何かの像を造って拜んではならない



この記事は糸永名誉司教のブログから転載したものです。糸永名誉司教の色々な思いは次のブログで御覧になれます。「糸永真一司教のカトリック時評」(<http://mr826net/psi>)

の順でゆるしの秘跡を受けよう仕向けた。ゆるしの秘跡は、子供たちのキリスト教的良心の形成に有効であると信じたからである。もちろん、子供たちにとっても、司祭自身にとっても、ある意味で骨の折れることであるが、キリスト信者の子どもたちの成長ためを考えれば大した問題ではない。当時、長崎の教会では、夏休みに入ると子供の黙想会という習慣があった。信者の子どもたちは、弁当持参で三日間の黙想会にあずかり、司祭の連続説教を聞き、告解と聖体拝領で終了するという具合であったが、わたしはこの子供の黙想会を海岸でのキャンプ形式で行うことにし、朝のミサ、午前中の「生活の中の祈り」のカテケジス、午後は集団で海水浴、そして夜はキャンプファイヤーという具合にプログラムを組んだ。最終日はゆるしの秘跡と各々の決心を奉獻する感謝ミサ。このキャンプを支え

い、ということだけではありませぬ。神を自らの思い通りに働かせようとするその思いをも意味しているのです。ということとは、もし私たちが神様に向かつて自

望を祈りとして捧げます。それ自体が悪いことではありません。しかし、私たちの祈りが偶像礼拝に陥らないためには、祈りの最後に「御心のままに」という神様に委ねる祈りを付け加えることが必要となるように思えます。では、もし祈りが聞き入れなかつたとしたら、信仰が揺らいでしまいますか？ 次回は神の全能ということ踏まえ、神を信じる者の歩みとはどういうものなのか、ということを考えてみたいと思います。

キッペス神父の黙想会
イエズスに近づいて
期間：8月3日(土)4日(日)
場所：マリア山荘
参加費：10,000円
申込：福沢智子
Tel.0993 (78) 4945

文芸

短歌	出水市 遠竹 睦郎	霧島市 政 ノブ子
	邦人神父の録音なしたる説教を再生して	十字架に羽を休める雀の子
	聴く梅雨の一夜	花の下友と別れの時惜しむ
	五百年経ちて聖人に列せられしジャンヌ・ダルクの往時徳ぶ夜	鹿兒島純心 川上 和
	あかときを目覚めて開く窓の空おぼおぼ	出水市 沖 弘子
	赤き葎まどふ月	降りそうな空にシスター草を引く
	吾亦紅のくらし朱の実乾きつつ羊朶の複葉うごくは蜥蜴か	純心学園 山頭 ノブ子
	一粒の麦の命のいぶき受け声高らかにクレド・ドミネ	梅落とし俳一句にて提出し
		蕪若葉ルルドの聖母メイ・クイン
		咲いて散り又咲く草花主の光
		鹿兒島市 徳永ノブ子
		紫陽花の一輪で足る集會室

友達を選んでクリスマスス子供を集いへの勧誘を行い、承諾を得た友達の名を教会学校に届け出る。クリスマスス子供集いは、第一部「聖堂におけるみ言葉の祭儀」、第二部「懇親の集い」からなり、第一部は司祭の司式、第二部は信者の小中学生がホスト役となって司会、接待、アトラクションとしての聖劇、サンタクロースを担当する。こうして、毎年大勢の地域の子どもたちが教会に集まって主の降誕を記念し、喜びを分かち合った。何よりも、信者の子どもたちが身をもって福音宣教の一端を担い、喜んで友達を教会に案内する経験をしたことは大きかった。

教皇と心を合わせて聖体礼拝

カテドラルで教会と弱者のために祈る

六月二日(日)午後五時から鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂で聖体賛美式があった。

これは「信仰年」の重要な行事としてパチカンの「世界中の司教座聖堂でローマと時を合わせて、教皇との交わりのうちに一



時間の聖体礼拝(テーマ「唯一の主、唯一の信仰」を行うよう)との指示に従ったもの。

鹿兒島教区の司教座聖堂

今年のザビエル祭

六月十三日(木)夜、教区本部で「ザビエル上陸記念祭実行委員会」が開かれた。各小教区代表と連合壮年会、教区巡礼委員会の代表者十五人が集ったこの日の会議では、今年の記念祭を八月十五日(木)に実施することとした。

第一部「巡礼」(午前八時 祇園之洲ザビエル上陸記念碑前出発)、第二部「ザ

司教執務室だより

いよいよ始まるWYD

七月といえば、いよいよワールド・ユースデー(WYD)。大方の人にとっては、それほど感慨はないかもしれないが、世界中から四、五百万もの若者が集うパチカン主催の若者の祭典。今回の会場はブラジルのリオデジャネイロ。テーマは「だから、あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなければならない」(マタイ二八・一九)。配布されたポスターには、「だから」を探しに、とある。参加する若者たちにとって動機はさまざまだと思うが、それぞれの「だから」があったといい。しかし、WYDはあくまで信仰を深めるための巡礼。

つまり、パパ様と一緒に主の受難と復活を祝うための巡礼であって、世界の若者たちと出会うのが中心ではない。そのため、火、水、木の三日間は準備として、各国司教によるカテケージス(要理教育)がなされる。金曜日には、「キリストの愛のしるし」として世界中で運び歩



いてください、とヨハネ・パウロ二世が若者たちに託した十字架(中央協議会ホームページより)とともに道行がなされるのがならわし。今頃はブラジル各地で十字架を迎え、若者たちの間に二十八日の教皇ミサに向かっている。土曜日には教皇ミサが捧げられるメイン会場までの徒歩巡礼。参加者は、その場で野宿をして一夜を明かすことになっている。こうして日曜日の朝を迎え、各地をめぐって十字架が祭壇横に安置されて主の復活を祝う感動的な教皇ミサで巡礼は頂点に達する。そしてミサの終わりにには今回の開催国が発表され、歓声と興奮に包まれながら、感激のうちに一大イベントが閉幕する。

日本からは、大学の学期中とあって五十人と少数だが、事務局員をはじめ、同伴する司祭やシスターを含む参加総数は六十五人。鹿兒島教区からの若者の参加は一人だが、旅の無事と、巡礼の実りがたくさんあるように、すべての参加者のために、多くの皆さんのお祈りを心からお願ひしたい。

被災地からの便り

カリタス大槌ベースの現状について

東日本大震災から三年、岩手県大槌ベースキャンプの現状について、今年四月ベイス長に就任した鹿兒島教区の川口茂終身助祭に聞いた。

「鹿兒島教区の皆さま、カリタス大槌ベースへのご支援ありがとうございます。最近のボランティアは五、六人で、主な活動は四十か所の仮設住宅にある集

七年前の約束「初ミサ」をささげる

実習先だった瀬留小教区で金神父

二〇〇七年一月に金東根神学生が韓国(釜山教区)から希望の星学園に十五日

間のボランティア実習に來られました。これは郡山司教が橋渡しとなって実現したものでした。活動に來た金神学生は利用者との交流だけでなく、学園入口のキリン像のペンキ塗りも数日され、腰を痛めたことを後で知り、神学生としての誠実な一面を感じました。

また、末吉卓也神父当時の瀬留小教区のミサを通して信徒との交流も深まり、送別会では金神学生の韓国料理で盛り上がりました。



タム神父とミサをささげる金神父

会所で「お茶っこサロン」を開くことです。集まる方は十五人ほどで足湯につかって頂きながら、手もみしたり色々なお話の傾聴活動を行っています。そして終わりには九州の各教会から届いたお菓子、果物を召し上がって頂いています。

大槌ベースに長期滞在しボランティアの支援に当たるスタッフは現在五人。厨房ではシスターズリレーで派遣されたお告げのマリア修道会のシスターたちがいる。復興まではまだまだ、粘り強い支援が必要である。

金神学生は別れの時に「いつになるかわからないけど、いつか必ず瀬留小教区で初ミサをします」と約束されました。そしてついに、その時が七年ぶりの六月六日(木)に実現しました。ミサの中で、金神父(四十一歳)は、皆さんとの再会と約束を果たすことに感謝の言葉を述べ、昼食会では、主の祈りを韓国語で熱唱。瀬留小教区(タム主任司祭)と韓国との懸け橋も実現しました。(報告・田下哲朗)

会と催し (7月)

- 3日(水) 聖トマ使徒 松森孝郎神父、山口重義神父霊名
- 4日(木) 西山達也神父叙階記念(一九六〇年) 栃尾泰英神父叙階記念(一九九三年) 年間第十四主日
- 7日(日) 典礼研修会・ザビエル教会・13時30分
- 9日(火) 竹山昭神父叙階記念(一九六七年) 宣教学校・教区本部・10時
- 13日(土) 年間第十五主日
- 14日(日) ブイジュ祭・瀬留教会
- 15日(月) 村田源次神父命日(二〇〇七年) 坂本進神父のホリスティック聖書講座「ヨハネ福音書六章―食生活と健康」・ザビエル教会集会室・10時・五百円
- 20日(土) 聖園老人ホーム開設五十年記念ミサ・10時 年間第十六主日
- 21日(日) ユゼビウス神父命日(一九七九年)
- 22日(月) 木村敏彦神父命日(二〇〇八年)
- 23日(火) WYDリオデジャネイロ大会・28日
- 25日(木) ティエン神父叙階記念(二〇〇六年) 聖ヤコブ使徒 福崎英雄神父霊名
- 28日(日) 年間第十六主日
- 31日(水) オリブの会・教区本部・14時 ハヌス神父叙階記念(一九五五年)

祈りの意向

「アベナ」ワールドユースデーに際し、教区の青年のために(21~29日)

【祈祷の使徒会】 宣 教・アジア 一般・ワールドユースデー 日本教会・若者の支援

+KABAYAN SEKSIYON+ Napapanahong Pagninilay sa Pananampalataya

Ang yaman ng pananampalataya ay nagagalugad ngayon sa teolohiya. Ang mga kapani-paniwalang katalusan sa pananampalataya ikapwa pinagmasa ang dogmatikong pagtuturo maging ang personal na paguko sa isang nagmamahal na Diyoslay pihadong ibinilang. Ang tinatawag na "intellectualist" [nakabatid sa mga turo ng Simbahan] at "fiducial" [personal na ugnayan sa Diyos] ay mananatiling mahalaga para sa mga mananampalataya.

Habang kasama ang dalawang dimensiyong ito sa napapanahong pagninilay sa teolohiya, binibigyang-diin din ang ikatlong aspeto ng pananampalataya. Maaring tawagin ang ikatlong aspeto na "misyonerong" o dimensiyong "nagpapatotoo sa pananampalataya. Ang pakikipagtagpo sa Diyos sa diwa ng pananampalataya ay naghahatid sa aktibong pagpapatotoo at pagpapalaganap ng Magandang Balita.

Sa madaling sabi, hinihingi ng pananampalataya na: (1) ipagkatiwala ang sarili sa Diyos, (2) kaalaman at pagtanggap sa mga turo ng Simbahan, at (3) masigasig na pangako na ipalagana ang pananampalataya, "ibig sabihin sa daigdig ang kanyang pag-ibig"! Sa katotohanan, kung hindi matagpuan ang isa o higit pa sa mga katangiang ito, maituturing na bubot o di pa ganap ang pananampalataya. Ang Kristiyanong pananampalataya ay palaging isang misyonerong pananampalataya!

Kailangan din ang masususing pag-aaral ng mga Banal na Kasulatan at pagninilay-nilayan ng maigi at isabuhay ang natutunan na mga salita ng Diyos. Kung walang kaalaman sa banal na Kasulatan, mahirap magpatotoo sa Diyos na hindi nakikita kung hindi pa ganap na malakas ang pananampalataya. Kailangan ang matatag at malakas na pananampalataya dahil ito ang magsisilbing daan sa pagkakilala ng lubusan sa Diyos at makilala din ng malalim ang bugtong na Anak ng Diyos si Jesukristo. Kung walang sapat na katatagan ang pananampalataya mahirap unawain ang mga gawa ng Diyos sa buhay ng tao, natin.

Sa mga pagkakataon na naghahina ang loob at nawawalan ng pag-asa ang tao ay napapalayo sa Diyos at hinahanap ng tao ang sariling kagustuhan at gusto niyan mabuhay na hindi sunod sa plano ng Diyos. Kaya karamihan sa mga bininyagan ay nalilito kung minsan sa paghahanap ng katotohanan. Marami ang nawawala sa tunay at tamang pananampalataya sa Diyos. Karamihan din ay hindi sapat ang pagkakilala sa mga turo ng Inang Simbahan dahil sa kakulangan sa pag-unawa, pag-aaral at pagninilay-nilay sa mga salita ng Diyos.

Kailangan din ng tao ang oras at panahon na dapat bigyan niya ng pansin ang kanyang pamumuhay dito sa ibabaw ng mundo, dahil ang karamihan ay bagay na materyal na lang ang kinakaharap at hinahanap, kakaunti na ang talagang naghahanap sa Diyos na buhay.

Katakismo sa Taon ng Pananampalataya (Fr. Dino Orloff)

一 天正遣欧少年使節のこと

昨年十一月十一日に大分教区で、大航海時代に天正少年遣欧使節としてローマに渡った伊東マンショの没後四百年記念祭が、宮崎県・イタリア大使館の協力を得て大々的に行われました。大分教区においてキリシタン史に名を残している人としては大友宗麟、天正少年遣欧使節の四人、及びこのほど列福されたイエズス会士ペテロ岐部(豊後・国東出身。江戸で殉教)の名が挙げられるでしょう。



大友宗麟画像 (大徳寺瑞峰院)

王使節の資格を持つイエズス会巡察師ヴァリニャーノ神父たちが帰国すると秀吉は彼らと謁見したので、キリシタンの洗礼を受けながらも棄教していた黒田官兵衛の息子・長政らからも、好意を持って受け入れられました。

その後の少年使節四人のことを記しておきましょう。以下、キリシタン研究家・松田毅一先生の『天正遣欧使節』からの文を引用します。

「伊東マンショ、中浦ジュリアン、原マルチノ、千々石ミゲルの四人は、天草において、二年の修練期を終えて、文禄二年(一五九三年)にイエズス会の修道士として誓願を立てまし

キリシタンの歴史 ⑮

小西行長と大友宗麟 (2)

溝辺教会主任司祭

坂本 進

た。しかし、彼らを取り巻く日本の環境、政府(秀吉)のキリシタン弾圧は強化されるようになり、彼らはこの事態を非常に憂慮するようになっていたのです。そこに、日本事情をよく知らないまま日本布教を行おうとして来日していた他の托鉢修道会が、公然と布教活動を始めました。

年後の一六〇八年、マンショ、ジュリアン、マルチノは長崎の岬にあった被昇天の聖母教会で、司教セルゲイラ(イエズス会)から、揃って司祭に叙階されました。しかし、同年、学問に秀で「妙貞問答」「破提字子」などを著した著名な日本人修道士・不干斎ファビアン(一五八五-一六二二)は、イエズス会を離脱、キリスト教を棄教してしまっ

た。しかし、彼らを取り巻く日本の環境、政府(秀吉)のキリシタン弾圧は強化されるようになり、彼らはこの事態を非常に憂慮するようになっていたのです。そこに、日本事情をよく知らないまま日本布教を行おうとして来日していた他の托鉢修道会が、公然と布教活動を始めました。

た。しかし、彼らを取り巻く日本の環境、政府(秀吉)のキリシタン弾圧は強化されるようになり、彼らはこの事態を非常に憂慮するようになっていたのです。そこに、日本事情をよく知らないまま日本布教を行おうとして来日していた他の托鉢修道会が、公然と布教活動を始めました。

た。しかし、彼らを取り巻く日本の環境、政府(秀吉)のキリシタン弾圧は強化されるようになり、彼らはこの事態を非常に憂慮するようになっていたのです。そこに、日本事情をよく知らないまま日本布教を行おうとして来日していた他の托鉢修道会が、公然と布教活動を始めました。

た。しかし、彼らを取り巻く日本の環境、政府(秀吉)のキリシタン弾圧は強化されるようになり、彼らはこの事態を非常に憂慮するようになっていたのです。そこに、日本事情をよく知らないまま日本布教を行おうとして来日していた他の托鉢修道会が、公然と布教活動を始めました。

二 天正少年遣欧使節たちの最期

伊東マンショは、司祭職を四年つとめた後、長崎のイエズス会修道院において病没しました。一六二二年、

享年、四十三歳。原マルチノは、徳川家康が一六一四年に発布したキリシタン禁教・追放令に従い、マカオに向かい、イエズス会のセミナリオ(神学校)の院長をもつとめ、一六二九年病没。享年、六十歳。

千々石ミゲルは、その後、大村藩主から追放されたとも言われています。

中浦ジュリアンは、慶長十九年(一六一四年)の禁教・追放令が出ても、死を覚悟して日本にとどまり、決死的布教を続け、家光の時代の寛永九年(一六三二年)、西坂において逆さ磔で処刑されたのです。死を長引かせるために、耳たぶに開けられた穴から鮮血が

銅像があるのを見られるでしょう。駅前銅像として、山梨県(甲斐)・甲府駅前の武田信玄、仙台駅構内の伊達政宗の銅像がよく知られています。

大友宗麟は、極めて多面性を持ったキリシタン大名として、特異な位置を占めています。戦国大名として、軍事力や貿易上の利益を得るために、欧州のキリシタンを利用せんとした面もあります。これは、有馬晴信、大村純忠らのキリシタン大名、島津貴久、義久にも、共通していました。奥州の覇者・伊達政宗が支倉常長を欧州に派遣したのも、欧州の力を後盾、又は利用して徳川政権を打倒し、天下の覇者となろうとしたことが真の狙いであつたので

しかし、宗麟は物質的利害の他に別の価値観を賦与されてもいたのです。宣教師たちは、島津など物質的利害関係の故に近づいてきた諸大名の領地にとどまることをしだいに疎んじるようになっていきました。しかし、宗麟の豊後については、宗麟が入信しなかつたにもかかわらず、二十数年もの間、宣教師たちは豊後から立ち去らなかつたのです。何故でしょうか。それは、「宗麟のキリスト教に対する信念の強さがあつたから(外山幹夫『大友宗麟』吉川弘文館 一六九頁)」なのです。

「キリスト教に傾斜するかと思えば、また一方で仏教にも傾き、同時に双方に興味を示す宗麟の底しれぬ幅広い包摂力は、たとえ一時期であるにせよ、一個の人格の中で矛盾することなく同居していた。宗麟は心の安らぎを求めて、魂の彷徨を重ねていたのである。

だがこのことは、宣教師たちを誠に当惑させるものであつた。しかしさりとして、彼らから疎まれるに至らぬところに、『政治家』宗麟の宗麟たる面目躍如たるものがあつた(同書 一七一-二頁)」のです。

宗麟は、フランシスコ・ザビエルと会つてから、二十七年後に洗礼を受けるに至りました。それまでどうして洗礼を受けなかつたのかといえば、豊後国主の立場にある者がキリシタンという立場を明確に打ち出せば治国がうまくいかなくならないという政治的判断があつたからと言われています。

九州全土の責任者・九州探題に任じられたほどの政治的判断力が、宗麟には備わつていました。

しかし、家督を長男・義統に譲り(一五七六年)、豊後の王の地位を退いたこと、そして、日向に神の国たるべき新天地を拓こうと決意するに至つたこと(一五七八年)が、受洗を実現させるに至らせたゆえんと言えましょう。とはいえ、日向に凱旋すべく起こした薩摩・島津との耳川の戦いにおいて、宗麟は惨敗を喫し(一五七八年)、以後、大友家衰退へと道を進めてしまつたのです。

信仰に基づく神の国を新天地・日向に建設せんとした戦いに破れ、大友家を衰退に向かわせたという外的状況は、反面、宗麟をして、信仰への道をより志向させるよう道を開かせました。

宗麟は、大友家が島津軍の力に押しされ衰退していく様を見ながら、一五七八年、秀吉による島津征伐が終わ

り、所領豊後が安堵された結末を見て取つて、五十八歳で没しました。宗麟の死に立ち会つた宣教師ラグーナは、宗麟の死の様をこう記しています。

「彼は、病気の間、かつて家族及び国について語つたことなく、デウスならびに魂に関することのみを思い、私に對しても、自分の魂のことを願うと言ひ、すでに全く力尽きるに至つても手を合せて祈り、その死する前、彼が心中に深く願つていた世子(義統)がキリシタンとなることを許したもうた神の御恵みを謝し、遂に聖徒の如く死んでいった」

『王の挽歌』の中で、遠藤周作も、同じように述べています。

「かつて六カ国の守護だつた宗麟は、世俗的な野望や野心などすべてを捨てて、ひそかに静かに死んだ」遠藤周作は、小西行長を描いた『鉄の首枷』の中で、「人が神を忘れても、神は彼を忘れず、問題とし続ける」と言わせています。その通りです。たとえ人が忘れたり切り捨てたりしても、神は、一度、神と出会つた人を「決して忘れず」「世話をし」「救いを得るよう」導き働きかけ続けてくださつて居るので、キリスト教(神)と出会うきっかけがどういふものであつたとしても、その出会いを、神は決して忘れることはありません。私たちも同じです。私たちが、一度、キリスト教に触れた人(求道者)に、かかわることをやめることなく、かわり続けていくことが大切です。なぜなら、神がそうされておられるからです。それが宣教であり、伝道であるのです。(続く)